人権啓発ネットワーク大東機関誌　第17号　2020年3月

ぬくもり

編集と発行　人権啓発ネットワーク大東
〒574-8555　大阪府大東市谷川１丁目１番１号
電話 072-870-0441　FAX072-872-2268

人権週間記念のつどい

ちゃんへん. 講演＆パフォーマンス

～あきらめない心～
知ろう！触れよう♪多文化共生

2019.12.7　大東市立市民会館　キラリエホール

今回の「人権週間記念のつどい」は二部構成で取り行われ、盛りだくさんの内容でした。

第一部は、ちゃんへん. さんのパフォーマンスから始まりました。世界で何度も金メダルを受賞したディアボロ（鼓型のコマを、二本の棒の先をつないだヒモで回転させる）は圧巻でした。コマを生き物のようにあやつり、クライマックスの空中高く飛ばした 3 つのコマを背中で受けるという離れわざに観客は大歓声を上げ、惜しみない拍手を送りました。

続けて、東アジアの近代史と在日の成り立ち、そして、ご自身の生い立ちを語って下さいました。在日コリアンだけが住む、電気も水道も通っていなかった地域で生まれ育ち、小学生の頃は厳しいイジメに苦しんだそうです。（自分は生きてたら迷惑をかける）と、死ぬことまで考えました。ある日、石をつめたバケツを落とされた現場を教師が目撃し、校長室に双方が呼ばれました。そこに母が駆けつけ、まず教師に「学校にイジメより面白いモンが無いからだ」と、そして子ども達には「素敵な夢を持ってる者は、イジメをしない！」と言いました。また、祖母からは「好きなことで人より努力して一番になったら、支えてくれる人が集まってくる」と言われ続けました。

◇◆◇◆◇◆

中学生になってジャグリングに出会い、それらの言葉を胸に、夢を叶えようと必死に練習をしました。そして、母に「一番になるためにアメリカに行きたい」と願い出ました。そのためにはパスポートが必要です。でも、そのとき初めて知ったことは、それまで家族は無国籍状態だったのです。渡米のためには韓国籍を選ぶことになります。分断された祖国の統一を願う祖母と、息子の願いを叶えたい母は、泣きながら激しく口論をします。祖父が間に入ってこう言いました。「統一はいつになるか…。こいつの夢を、国籍で奪ってはいけない。今日は、ちゃんへんの夢を祝福する日で、ケンカの日じゃない。世界中を回って、色々な文化や人の話を聴かせろ」と。そうして世界的パフォーマーちゃんへん. が誕生し、これからも日々パワーアップしていくのです。

ちゃんへん. さんは、ヒップホップのシンガーでもあります。第一部の最後に自作の「ゴースト・ブルース」を歌って下さいました。ハラボジ（祖父）の過酷な半生と、もう病気でご飯がのどを通

らないのに、「パンモゴンナ？（飯食ったか？）」と自分に言ってくれる…。そんな歌を聴きながら、私は涙が止まりませんでした。

第二部は、四条太鼓で幕を開けました。四条小・四条中合同の和太鼓集団で、「暁（あかつき）」という曲を一所懸命に演奏してくれました。子どもの太鼓とあなどるなかれ！音もそろって大迫力でした。一人ひとりのあいさつは、はにかみながら「かっこいいから入りました」「教え合いが良いです」とやっぱりかわいい子ども達でした。

続いては、大阪産業大学の様々な国の留学生と日本人学生が参加する OSU 舞龍団の舞台です。

まずは、玄宗皇帝の寵愛（ちょうあい）を楊貴妃と競い合った、梅妃（ばいひ）に扮し舞う中国の宮廷舞踊「チンフンウ」です。真紅の衣装で華麗に舞う美しく妖艶な踊りは、とても大人びていました。

次に、ベトナム舞踊「学校へ通う道」です。民族衣装で着飾った４人の少女が、桃色の傘をクルクル回しながら、学校は遠いけど優しい先生に会える楽しさを表現して踊ります。笑顔がとても素敵でした。

ちょっと休憩で、留学生５人へのインタビューもありました。事前に小学生が用意してくれた質問に答えます。「困ったことは？」の質問には「言葉が通じず、交流が難しいところ」と答えましたが、「奈良や京都への旅行が楽しい」「優しい人に出会った」「先輩や先生も助けてくれる」「一人で演じる落語に驚いた」「アニメが好き」などなど、日本を満喫されている様子で、「お店に並ぶのが不思議だったけど、今は私も並びます」と、なじんでいただいているようでした。

そしてクライマックスは、四条太鼓も加わっての「舞龍」です。金色の大きな龍が、玉を追いかけて舞台狭しと飛び回ります。回転し、とぐろを巻き、様々なポーズを決めます。長い身体が交差し地面をうねるときには、演者同士が龍を支える棒を踏まないように、うまく飛び越えます。バックの四条太鼓は、曲からリズムを作って合わせるのは初めての経験でしたが、飛び跳ねながら楽しそうに太鼓をたたきます。最後に龍が天に昇っていくポーズを決めると、割れんばかりの歓声と拍手が沸き起こりました。

◇◆◇◆◇◆

舞台は色とりどりで美しく、パフォーマンスはワクワクと楽しい…。様々な民族や文化が集まり交流すると、こんなに素晴らしいものができあがるのだということを体現したステージでした。悲しい歴史を乗り越えて、お互いを尊重し合い、親睦と融和をはかった演者達は、みな誇らしげでキラキラ光っていました。

（レポーター：あき）

※ 次ページの記事について

2019 年役員・常設委員フィールドワークは、被差別部落を訪問し反差別の運動を担う方々から大変貴重なお話を賜りました。しかし、この報告を本紙に掲載するにあたり、広報委員会内で「地名を表記すべきかどうか」について激論が交わされました。地名が独り歩きし、部落差別を助長することになるのではと悩みました。

フィールドワークを受け入れてくださった方々は、その地名に誇りをもち、また、伏せてしまうと文章としてもいびつなものになってしまいます。そこで、お話いただいた方々とも相談させていただき、更なる議論を重ねた結果、この度の記事は、地区名を表記しないこととさせていただきます。そして、私たちも更に部落問題を真正面に据え、差別をなくす啓発活動を一層進めていく決意を固めた次第です。皆様にもご理解いただき、あらためて部落問題を考えるきっかけとしていただければ幸いです。

人権啓発ネットワーク大東　役員・常設委員フィールドワーク

2019 年 10 月３日（役員・常設委員 15 名、事務局２名参加）

最初の訪問地では、菱田不二三さん（自治連合会会長）より、「今日と、明日に向かって」と題してご講演をいただきました。

大正の頃から学校では、伊東校長率いる教師集団が子どもたちを苦しめる部落差別に怒りを持ち、「世間の差別のために自暴自棄にならないよう‘為せば成る’という信念を持たす」「われらを劣等視する世間に対し、何ら劣るところのない証拠を示す」との目標を掲げました。「運動部」を立ち上げ、愛情深く鍛え上げ、陸上のリレーでは全国大会も含む様々な大会で優勝を重ねました。さらに、課外活動に「印刷部」を設け、厳しい就職差別に立ち向かうために「手に職をつけること」をめざしました。「おやっさん」と慕われ、子どもたちや地域の人々との深い信頼関係を築いた伊東校長の生きざまと、教育の歴史の原点をお話しいただきました。

そして、1995 年に教育連絡会が発足しました。「しんどい子の親も、しんどい」という「With の力」や、「子どもを家庭に放っておかない」という「PTCA の力」（C はｺﾐｭﾆﾃｨ）、また、「元気の素は仲間づくり」を基本にした取り組みが紹介されました。ビオトープや学習広場を創設し、教育環境の基盤整備を担っています。

また、部落地区にとどまらず、祭りや消防をはじめとした周辺地域との連携・協働の取り組みや、市民全体の仕事・居住・教育等における権利の侵害とも闘ってこられた、熱い思いの込もったお話を聴かせていただきました。その後、ビオトープを巡り、銀行資料館を見学しました。

午後から訪問した人権資料展示施設では、後藤直さん（佛教大学教育学部教授）より、「まち人とその歩み」と題して、各展示室を一緒に巡りながら、お話いただきました。

1951 年のオールロマンス事件（部落差別を助長する出版物）をきっかけに、1957 年から住宅地区改良事業が本格的に実施され、1982 年までには 20 棟 524 戸の改良住宅が建設されました。並行して、コミュニティセンター（旧隣保館）や保育所、福祉センター、診療所、浴場等々が整備されました。

1960 年代までは日雇いなど不安定雇用が多数を占めていましたが、1970 年代から現業職への雇用対策が進められました。差別撤廃の取り組みと住環境改善と共に、就労・雇用等の「格差の是正と低位性の克服」をめざした「まちづくり」が取り組まれていきました。

しかし、1980年代半ばより、働きざかりや、子どもがいて地域を支える中心となる層が、持ち家を求めて地区外へ転出するという状況が目立ち始めました。一方で、高齢者やひとり親家庭など、生活上の困難や課題を抱えた層が増えてくる傾向にありました。

1990 年代に入り、老朽化した住宅建て替えの声が上がり、これまでの成果と課題を検討した上で、「第２のまちづくり」がはじまりました。先進的なパートナーシップ型まちづくり運動の学習、住民参加によるまちづくりの視察、アジアのスラムで住環境改善運動に取り組む人々との交流、専門家との出会いやアドバイスなど、様々な準備を行い、「2010 年のまちづくり運動」により、1993 年「ふるさと共生自治運営委員会」が発足しました。地区が育んできた人材・力を地域の中に蓄積し、地区外からも様々な力を呼び込み、支援が必要な人々を支える仕組み作りが提案されました。そして、定期借地権を利用したコーポラティブ住宅（有志が集まってﾌﾟﾗﾝを出し合う共同住宅）を、2007年に竣工しました。今後は、地域施設の移転や、その跡地に住宅を建設する等の「第３のまちづくり」を展望しているとのことです。後藤さんのお話を聴きながら、「居住は人権である」と思いました。

となりの活き生きサン

ここでは、大東市の人権推進につながる
取り組みを行っておられる方々や団体の紹介をさせていただきます

手話を愛する世界一のサインシンガー

強力　翔（ごうりき かける）さん単独インタビュー

2020 ヒューマンコンサート（２月８日）に最高のパフォーマンスで会場に感動を与えてくださった、Three Piece（ｽﾘｰﾋﾟｰｽ）のヴォーカル：強力 翔さん（1986年生、大東市在住）を追いかけ、その素顔に迫ります。

ヒューマンコンサートからさかのぼること ３週間。その日は、堺市の東文化会館でのロビーライブでした。誰でも無料で入れる会場には、ファンの方も含め約 30 名の観客が詰めかけていました。

飛び切りの笑顔で登場した強力さんは、「手話を交えてなので、お話はゆっくりになります」とごあいさつ。１曲目の‘WE LOVE MUSIC（ｳｨ ﾗﾌﾞ ﾐｭｰｼﾞｯｸ）’が始まりました。優しい歌声、感情豊かな表情、美しいダンスのような手話。まるで、上等なミュージカルを観ているような感覚で、すぐに「強力ワールド」に引き込まれました。そして‘GIFT（ｷﾞﾌﾄ）’‘ママ’‘夢の地図’と、オリジナル曲は続きます…。

強力 翔という「すごい」お名前は、本名です。サインシンガーは造語で、「手話で歌う人」という意味。テレビドラマ「オレンジデイズ」に感銘を受け、「ろう者に気持ちを伝えたい」と４年ほど前から習い始めました。そして、「世界一の」は「言うたモン勝ち」だそうです。

幼いころは母子家庭で、お金が無くて欲しいものを買ってもらった記憶はありません。でも、母を恨んだことはなく、むしろ愛情をいっぱい注いでもらい、自分より他人のために頑張る姿を尊敬しています。‘ママ’の曲はこう歌います。

『気付けばあなたの周りには/たくさんの人が集まってきて/笑顔が溢（あふ）れていた
ずっと何年たっても/大きな愛で包まれてるんだね/目と目合わせて言えない/本当感謝してるよ ありがとう』

いつか、母と二人で講演会をするのも、実現したい夢の一つです。

小・中学生のころは今と真逆で、人見知りで人前に立てない内気な性格の上に、悪さやケンカばかりしていました。それがポンとはじけたのは高 1 の春、友だちと行ったカラオケでした。強引にマイクを渡されイヤイヤ歌ったのに、「上手い！」とほめてくれたのです。「自分が歌うと喜んでくれる」ことが快感になり、早速ギターを手に入れました。軽音に入部し、弾き語りに熱中しました。「将来は福祉の仕事をする」と言っていたのに、高３の三者面談で、いきなり「ミュージシャンになりたい！」と宣言してしまいました。驚きあきれる母を説得し、音楽の専門学校に通いました。そしてゴスペルを勉強しに、アメリカにも行かせてもらいました。（結局一周回って、手話で

福祉に近づいています。）

アメリカの教会で歌っていると、それまでは「自分のため」だった音楽が、「周りの人のため」に変わってきました。「モテたい」とか「お金持ちになりたい」じゃなく、「聴く人に幸せになってもらいたい」と思うようになったのです。

卒業後、小さな事務所に所属し、いろいろなバイトをしながら歌手活動をしていました。30 歳を前に独立し、‘GIFT’を発表しました。この時期に手話を習い始め、そこで出会った、ろうあ者 yossy（ﾖｯｼｰ）さんとのパフォーマンスが始まったのです。

サインシンガーとなって、様々な障がいをおもちの方々と出会うようになりました。そして、自分の世界が広がりました。障がいによって、壁になるものが全然違う（例えば段差を越えられない車いすと、段差がないと困る視覚障がい）ことに気づいたり、不自由だからこそ優しい心があることを知りました。手話を習い始めたとき、当事者に全く伝わらず落ち込んだこともありました。そんなとき母が、「まずは、手話を知らん人に伝える架け橋になったら？」と言ってくれ、道が開けました。好きな歌で一人でも一つでも手話を覚えてくれる人を増やす…という使命。自分がしんどいとき、「こんなんで逃げたらアカン」と思うようになりました。自分は歌えて、パフォーマンスができて、伝えることができるのだから…。「障がいのあるなしに関係なく楽しめる」「手話を広めながら、いろんな壁を無くす」「まず一番身近な人から大事にする」こんなことが今大切に思っていることです。

子ども達にも話がしたいです。夢のかなえ方や、仕事の話…。仕事というのは、単にお金をもらうことじゃなくて、前にいる人に喜んでもらうことだと思うのです。いろいろなことがあった自分だからこそ伝えたい、伝えられることがあるはずです。だから、サインシンガーとしてだけでなく、講演会も増やしていきたいです。YouTube（ﾕｰﾁｭｰﾌﾞ）もやっていますが、これで稼ぎたいのではなく、家から出られない人や、引きこもっている人にも観てもらって、少しでも元気になって欲しいからです。

年間 200 回くらいパフォーマンスをしています。できるだけたくさんの人に出会いたいのと、「強力に来て欲しい」と思っていただける主催者の方々のご希望に応えたいのです。ある日デパートで歌っていると、たまたま通りかかった方が、「良かった！」と言ってくださいました。その人には悩みごとがあり外にも出られなくなっていたのに、その日は親に誘われ買い物に来て、歌声が聞こえてきたそうです。そして希望をもって、前向きに悩みを解決し、それからずっとファンでいてくださいます。こんな出会いが一番嬉しいです。

1 時間半のインタビューでしたが、あっという間に時が過ぎました。ずっと前向きに、キラキラした目でお話してくださいました。「言いたいことの 10 分の 1 も話せなかった…」とあふれる想いを残しつつ、「今度は飲みながらじっくりと！」と約束をして今回は終えました。これからも「ぬくもり」は、強力 翔 さんを追いかけ、応援し続けます。　　（レポーター：あき）

「北河内人権啓発推進協議会」からのお知らせ

守口・門真・寝屋川・枚方・大東・四條畷・交野 7 市の市民の人権意識高揚をはかることを目的に、今回は、児童等への「体罰」「児童虐待」についてのリーフレットとポスターを作成しました。市内各施設への掲示およびネットワーク大東の各事業にて配布を行う予定です。

つながる ぬくもり

今年もわが町大東に「あったか光線」があふれる年でした

3/9

２０１９ヒューマンコンサート
「夢を叶えたやんちゃな歌姫」～こえを取りもどした声楽家～

声楽家の青野浩美さんにサーティホール・多目的小ホールにお越しいただきました。青野さんは、23 歳のときに病気になり、寝たきりの状態になりました。懸命にリハビリに取り組み、車いすで歌えるようになった青野さんは、今度は無呼吸発作を発症し、気管切開し、人工呼吸器を付けるかどうかの決断を迫られました。医師に「歌うことは無理。」と言われても、（歌えるようになった）前例がないのなら、自分が前例になればいい。」と、手術を受けます。その後も、さまざまな工夫とチャレンジで歌えるようなりました。講演ではすばらしい歌声も披露され、観客を魅了しました。「このカラダは、わたしに出会いをくれた。このカラダで幸せ。家族・友だち・仲間がこう思わせてくれた。」と熱く語る青野さんの姿に参加した全員が感動しました。

5/1～4

人権パネル展

野崎観音会館で開催しました。今年のテーマは「知っていますか　ハンセン病　隔離の必要のないことを」でした。ハンセン病に関するパネル展示、障がい者事業所ハートフル大東による支援物品の販売等を行いました。参加者は 1,996 人と多くの方にお越しいただき、大盛況のうちに終えることができました。参加された皆様、ありがとうございました。

5/3

講談会

野崎観音会館で行われました。「ハンセン病を伝える講談風語り」～煌めく百の物語　大東特別編　沖縄愛楽園から未来へ送るメッセージ～というテーマでした。講談師の伊藤貴臣さんが午前の部では「島から沖縄愛楽園へ」、午後の部として「沖縄愛楽園から社会という海原へ」というタイトルの講談と、元患者さんのお話を聞きました。93 名の方が参加され、ハンセン病について多くの学びがありました。

5/11、12

憲法週間記念のつどい
「あん」の上映会と小説「あん」の作者ドリアン助川さん講演会

映画「あん」の上映会には、なんと254人もの方が参加されました。会場がいっぱいになりました。樹木希林さんが主演するこの映画は、ハンセン病だった主人公徳江さんが、千太郎という若者が営むどら焼き屋に入り込み、本当においしいあんづくりを伝授するというストーリーです。その徳江さんが亡くなり、残されたテープに「このあんができるまで、どんな空を見

～2019年を振り返って～

て来たのか、どんな風にあたってきたのか、考えるの。」というシーンでは、「あん」と人の人生が重なって感じられ、とても感動的でした。

翌日のドリアン助川さんの講演会では、助川さんの小説「あん」にかけてきた情熱がいかに大きなものであったかを強く感じました。助川さんがミュージシャンとしてライブ活動をしていたときに、ハンセン病の元患者の方と出会い、このハンセン病をテーマに絶対に本を書きたいと思われたそうです。両日とも参加された方も多く、帰り道、「とても感動的だったね。」「いい話だったね。」という声が聞こえました。

6/21　市民・会員交流フィールドワーク

岡山県瀬戸内市にある「邑久光明園交流会館」と「長島愛生園歴史資料館」に交流と見学に行きました。参加者は 31 名でした。明るく清潔で病院も学校も宗教施設もすべてがそろった小さな街でした。施設の方からハンセン病への間違った理解から悲惨な出来事が多くあったこと、医療が進み、ハンセン病がすぐに完治する病気で、感染力も非常に弱いと分かってきたとのお話も聞きました。ハンセン病への理解を一層深めることのできたフィールドワークとなりました。参加された皆様、ありがとうございました。

9/21　親と子で平和を考えるつどい

大東市立市民会館キラリエホールで開催されました。213 名もの参加があり、平和への関心の高さを改めて感じました。第一部は内田祥子さんと、腹話術の相棒「ハッくん」との軽妙なやり取りで進行され、笑い声も響く中で、平和について考え合い、続いて三箇小学校の児童から「平和バスツアー」の報告がありました。第二部は、映画「この世界の片隅に」が上映されました。主人公すずが、不発弾の爆発で片腕を失いながらも、戦争を終える玉音放送を聞きながら、「最後の一人まで戦うんじゃなかったんか！」と激昂します。またひとつ戦争の苦しみのリアルな姿が描き出された映画でした。

地域集会　「誰もがその人らしく」～LGBT(性的少数者)の人権～

今年のテーマはＬＧＢＴです。Ｌはレズビアン、Ｇはゲイ、Ｂはバイセクシュアル、Ｔはトランスジェンダー、それぞれの頭文字を取ってＬＧＢＴです。左利きの人と同じくらい性的少数者はいると言われています。ＤＶＤは会社の中の何気ない会話から、性的少数者の人権について考える内容となっています。各地域でＬＧＢＴについて理解が深まり、すべての人が生きやすい世の中づくりに前進することを願って、地域集会が開かれています。

☆ 「市民じんけん講座」や「ステップ・アップ講座」など、まだまだ書ききれないほどたくさんの取り組みがありました。2020 年も、ふるってご参加お願いいたします。

人権啓発ネットワーク大東とは

近年、子ども･障がい者・高齢者等への虐待や特定の民族に対する憎悪表現など多くの人権問題がニュース等で取り上げられています。社会環境が大きく変化し、まだまだ「人権」が尊重されていない状況が現在の日本には存在しています。

大東市では、人権尊重のまちづくりをめざし、市民による市民のための自主的な組織として「人権啓発ネットワーク大東」が 2013 年４月１日に設立しました。

目的

一人ひとりが生まれながらにもっている基本的人権が尊重される社会の実現に向けて歩み続けるため、自らの人権意識を高め、お互いの人権を認め合うとともに、わたしたち市民が行政と協力して、人権啓発活動を積極的に行い、人権尊重のまちづくりをめざす。

活動内容

・自らの人権意識を高めるための研修会などへの参加・参画。
・人権尊重の理念を広く市民に広げるための啓発・広報活動など。

☆入会案内

「このまちをよりよくしたい。そのために何かをしたい。でも何をしていいかわからない…」というあなた！お互いの人権を認め合い、地域の発展、人権尊重のまちづくり、そんな社会の実現に向けて、一緒に活動しませんか？

※詳しくは**大東市ホームページ**（http://www.city.daito.lg.jp/）に掲載していますのでご覧ください。

※**「人権啓発ネットワーク大東」の Facebook** も開設！
様々な活動の報告など、情報発信していますので、こちらもぜひご覧ください
（https://www.facebook.com/
人権啓発ネットワーク大東-1987405014833313/）

入会等の申し込み･問い合わせ

人権啓発ネットワーク大東事務局（大東市人権室内）
〒５７４－８５５５
大東市谷川１丁目１番１号
Ｔ　Ｅ　L:０７２－８７０－０４４１
Ｆ　Ａ　Ｘ：０７２－８７２－２２６８
Ｅメール：j_keihatsu@city.daito.lg.jp